

平成 18 年度畜産大賞 経営部門最優秀賞受賞事例の概要

「地域社会と調和しながら確立した草地型酪農」

受賞事例名称 秋田県由利本庄市 柴田輝男・誠子（酪農経営）

柴田輝男・誠子さんの経営は、秋田県内で比較的温暖な地域である南西部の由利本庄市に立地している。

経営主の輝男さんは、昭和 47 年に柴田家に婿養子として入り、同年経営移譲を受け、酪農（経産牛 8 頭）+ 水稻（5ha）の複合経営として出発している。その後、牛群改良を行いながら増頭し、平成 12 年には経産牛 60 頭規模に到達するとともに、稲作を作業委託し、酪農専業経営に移行している。

経営の特徴をあげると、第 1 に自給飼料生産基盤の拡充による良質粗飼料の確保である。現在の自給飼料生産基盤は草地 39ha と転作田 1ha の計 40ha で経産牛 1 頭当り 60 a と充実している。草地 39ha は畜産農家の減少に伴って遊休化した草地を借地し、土壌分析等に基づいた適正な肥培管理と年 3 回刈りを実施することで、10 a 当たり 4 t の収穫をあげている。

第 2 に牛群改良への取り組みと高い飼養管理技術である。経営主は経営開始時から、牛群検定の成績を積極的に活用しながら牛群の経済能力と乳質改善に努めており、搾乳もと牛は全て自家育成で確保している。このような取り組みの結果、全日本ホルスタイン共進会に 6 回連続出品する成果をあげている。また、平成 11 年に家畜個体識別モデル事業の耳標装着にいち早く取組み、現在まで牛群検定成績の分析結果をもとに泌乳能力の高い牛群整備を行っている。

さらに、ET 技術を活用した付加価値生産にも率先して取り組み、これまで蓄積したほ育技術を生かして ET 和子牛生産を行い、高い収益を上げている。

また、柴田氏は生産物に対して責任を持つとの考えから、県内酪農家の牛群検定加入率の向上や肉用子牛の出荷時に出生確認証明書を添付する制度の導入に率先して取り組んできた。

以上のような取り組みにより、高い飼料自給率（乳飼比 25.9%）、少ない種付回数（平均 1.4 回）、短い分娩間隔（12.9 ヵ月）、低い減価償却費（経産牛 1 頭当り 4.8 万円）、高乳量・高乳質生産（経産牛 1 頭当り乳量 8382kg、無脂固形分率 8.41%、乳脂率 4.00%）等の技術成績をあげ、生乳 1kg 当り生産原価 56 円弱（3.5%換算 49 円弱）の低コスト生産を実現している。経営収益は経常所得で 2186 万円強（所得率 37%、経産牛 1 頭当り 33.3 万円）を安定的に確保している。

柴田さんの経営は、畜産農家の減少で遊休化した圃場を借地及び再整備して活用する草地型酪農経営である。今後、中山間地域の草地を始めとする土地資源の有効利用と産業としての酪農経営の再構築にむけての施策のヒントを多く示唆している模範的経営である。